

# 市民文化財研究員活動報告書 28

2024. 3

仙台市富沢遺跡保存館

## はじめに

地底の森ミュージアムが開館して27年が過ぎ、これまで100万人を超える方々のご来館を頂きました。これも皆様方のご厚情の賜物と感謝申し上げます。

当館では、学校教育活動との緊密な連携を図るとともに、市民の生涯学習を支援するため、各種体験教室・講座を開催しております。また、その一環として遺跡や考古学について深く学びたい、そうした意欲を持った方々の自主的な学習を支援するために、市民文化財研究員育成という特色ある事業を行ってまいりました。これまで、26期183名が市民文化財研究員の事業を修了し、多くの方々が当館のボランティアとして様々な活動を行っております。

今年度、第27期市民文化財研究員2名が、それぞれのテーマに沿った活動を行い、その活動成果を報告するために本書を作成しました。これからの研究員の活動に期待するとともに、今後とも皆様方のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

令和6年3月

公益財団法人 仙台市市民文化事業団  
仙台市富沢遺跡保存館  
館長 武山 剛久

# 目 次

I 市民の自主的な生涯学習活動への支援

II 市民文化財研究員とその活動

III 活動支援概要

IV 活動報告

陸奥国府を支えた原遺跡について 竹内 誠 7

後期旧石器時代仙台平野周辺の  
狩猟採集民の住居について 橋本 知之 15

# 例 言

1. 本書は令和5年度市民文化財研究員活動報告書である。
2. 本書の執筆は、IVの各活動報告を市民文化財研究員がそれぞれ行い、その他は仙台市富沢遺跡保存館である。全体の編集は館員鈴木英梨が行った。
3. 報告書作成に際して、主に参考とした文献や資料は各活動報告に参考文献として記載している。

# I. 市民の自主的な生涯学習活動への支援

## 1. 基本構想における位置づけ

地底の森ミュージアムの建設は、1988年の富沢遺跡第30次調査における2万年前の森の跡と旧石器人のキャンプ跡の発見を契機としている。それは、この調査成果の重要性から、仙台市が調査対象地区の保存を決定し、その活用を図るために、翌年、基本構想策定委員会を設け、策定された構想において「考古系総合博物館」の建設がうたわれたことに始まる。この構想では、博物館の様々な活動の中で、生涯学習活動の基本方針の一つとして、「市民が、文化財に関するさまざまな情報にふれ、興味や関心に応じて自らのテーマを追求できるようにする」とし、「市民の考古学教室」などを通して、自主的な活動を支援する方法が考えられていた。これは、文化財、特に埋蔵文化財について、その大切さを知ってもらうために、それまで行われてきた発掘調査の現地説明会や考古学に関するさまざまな講座、講演会、展示会などとともに、より積極的な方法を推進していくことを示したものであった。

## 2. 生涯学習活動と市民文化財研究員

地底の森ミュージアムでは、生涯学習活動として、来館者に自由に参加してもらう「たのしい地底の森教室」、「石器を使ってみよう」コーナー、参加者を公募する「体験協教室 親子でつくろう古代米」、「考古学講座」、「富沢ゼミ」などを行っている。こうした活動の参加者には、遺跡や考古学についてもっと知りたいと思う市民や新たに興味関心を持つ市民がおり、専門的な質問を受けることもある。また、一般の来館者についても、その関心は富沢遺跡だけではなく、地域や時代を越えていることを認識させられる。

こうしたこともあり、基本構想にもうたわれていた市民の自主的な活動の支援をどのように行っていくかが開館を前後するなかで検討された。施設面では館内に市民活動のための専用スペースはなく、また、研修室の利用や利用日の工夫、支援する市民の数など、制約は多かったが、平成8年度に第1期の「市民文化財研究員」15名を募集し始め、令和4年度まで26期にわたって合計183名の活動成果を『市民文化財研究員活動報告書1～27』として刊行してきた。平成20年度からは報告書をホームページで公開している。

令和5年度は、第27期市民文化財研究員として2名が参加し、それぞれのテーマに沿って自主的に活動を行った。

また、今年度はより充実した活動を行うため毎週水曜日としていた活動日を隔週水曜日とし、定員を10名から5名に変更した。

## Ⅱ. 市民文化財研究員とその活動

### 1. 目的

考古学や遺跡に興味をもっている市民が、地底の森ミュージアムを核として、その支援を受けながら、自主的にそれぞれのテーマを学び、歴史や文化をより身近なものにすることを目的としている。

### 2. 活動期間

年度の1年間とし、隔週水曜日とする。定員は5名（今期は令和5年5月10日～令和6年3月20日）

※10・12月は自主活動期間とした。

### 3. 支援の内容

#### (1) 研究場所の提供

- ・地底の森ミュージアム1階研修室の開放。

#### (2) 研究の補助および研究方法についての相談受付

- ・学芸員による考古学についての講義。
- ・学芸員による個人ごとの対応。

#### (3) 収蔵図書の利用

- ・室内での閲覧。必要箇所の複写については有料。

#### (4) 市民文化財研究員証の発行

- ・登録日あるいは相談があるときは、これを提示し入館。

### 4. 活動内容

#### (1) 隔週水曜日午前2時間の学習（地底の森ミュージアム1階研修室）

#### (2) 年1～2回開催する見学会での学習（遺跡や博物館施設の見学）

#### (3) 活動報告書の刊行

#### (4) その他

- ・館内では、市民文化財研究員証をネームプレートとして付ける。
- ・登録日が休館日にあたった場合は学習を休みとし、翌日に順延しない。
- ・研修室が使えない場合があるため、事前に予定表を配布して周知する。

### Ⅲ. 活動支援概要

#### 1. 概要

研究員はそれぞれのテーマで館内外で活動を行った。それについては活動報告に述べられている。ここでは館での支援活動の概要を総括する。

令和5年5月10日～9月27日	登録日学習の開催日
10月	自主学習期間
11月8日～11月22日	登録日学習の開催日 活動報告執筆のための相談
12月	活動報告執筆のための自主学習期間
令和6年1月10日～3月20日	活動報告執筆、相談

#### 2. 第27期市民文化財研究員修了者（五十音順）

竹内 誠 橋本 知之

#### 3. 隔週1回の半日単位の学習

今年度は、隔週1回の登録日を水曜日の午前に設け、活動を行った。

#### 4. 登録日と出席者数

令和5年4月26日	オリエンテーション【2名】		
5月10日	館外活動【2名】	5月24日	講義【2名】
6月7日	講義【2名】	6月21日	講義【2名】
8月2日	館外活動【2名】	8月16日	講義【2名】
8月30日	講義【2名】	9月13日	館外活動【2名】
9月27日	館外活動【2名】		
11月8日	報告テーマ相談【2名】	11月22日	報告テーマ相談【2名】
令和6年1月10日	報告作成相談【2名】	1月24日	休講
2月7日	報告提出【2名】	2月21日	報告校正【2名】
3月6日	報告校正【2名】	3月21日	修了式【2名】

#### 5. 館外活動

5月10日は富沢遺跡周辺の遺跡散策、7月5日は仙台市縄文の森広場見学、8月2日は名取市歴史民俗資料館、9月13日は郡山中学校のピロティ展示および郡山遺跡の見学、9月27日は岩沼市ふるさと展示室の見学を、希望する当館ボランティアと共に行った。

見学にあたり、展示案内等にご協力いただきました関係各位のみなさまに、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

## IV. 活動報告

考古学あるいは遺跡をもとにして、研究員がそれぞれの興味関心をもとにテーマを設定し、調査を行った活動成果をまとめた。第27期市民文化財研究員は、令和5年3月の募集で、申込は2名であった。

それぞれの活動をしてみると、もともと地域の歴史に関心が深く、講義や館外活動を受ける中で、レポートのテーマ設定のきっかけをつかんだようであった。また、レポートの作成方法についての説明も行いながら活動していただいた。それぞれが取り組んだテーマについては、遺跡や博物館の見学、関係施設への調査、文献やインターネットなどからの情報収集など、各自が様々な方法で行い、課題と向き合っていた。

こうした研究員の活動は、それぞれのペースを大切にしていり、今回は2名の活動を報告することにした。



5月24日 館内での講義



8月2日 名取市歴史民俗資料館見学



9月13日 郡山遺跡見学



9月27日 岩沼市ふるさと展示室見学

# 陸奥国府を支えた原遺跡について

竹内 誠

はじめに

市民文化財研究員の館外活動で岩沼市の文化財についての説明を受け、「原遺跡から見つかった須恵器の中には、現在の静岡県からの移住者が作ったと思われるものもあります」と聞いた一言が、静岡県生まれ岩沼市在住の私が原遺跡に興味を持つきっかけだった。

自分の祖先の親類が原遺跡周辺に移住していたかもしれない。東日本大震災直後、岩沼の自宅から仙台港口の製油所火災の様子がよく見えた。同じように、780年に起こった多賀城の火災を不安な気持ちで眺めていた人物がいたかもしれない。そのような思いを抱き、原遺跡について詳しく調べてみようと思った。

本レポートでは、郡山から多賀城へと陸奥国府が移り、蝦夷との緊張が続いた時代、原遺跡がどのような役割を果たしていたかを整理するとともに、交通路についても考察する。

## 1 原遺跡の位置

原遺跡は JR 岩沼駅南方約 3.2km、竹駒神社から約 2.5km、阿武隈川左岸標高約 5m の自然堤防上にあり、現在の河口からは約 11km 遡ったところに位置する。対岸には平安時代初期に作られたとされる三十三間堂官衙遺跡（亘理郡亘理町）があり、標高 44m ほどの丘陵から約 1.6km の直線距離で見下ろされる位置関係にある。

郡山遺跡（仙台市）から直線距離で約 15.8km、多賀城跡（多賀城市）から直線距離で約 27.6km の位置にある。それぞれ徒歩で移動した場合に、郡山遺跡からは半日、多賀城跡からは終日の移動圏内であると思われ

る。原遺跡から多賀城跡への視野を遮る丘陵は無く、人工物が無ければ、愛島丘陵の東端にあたる雷神山古墳（名取市）の東側に、標高約 30m の多賀城国府跡を望むことが可能である。

図 1 に遺跡間の位置関係を示した。

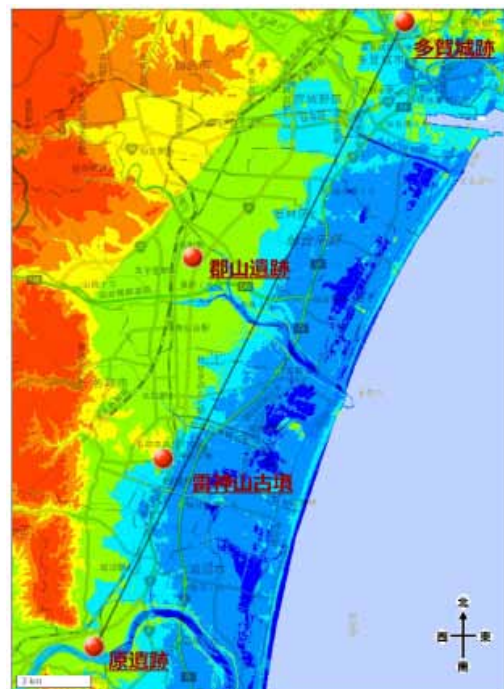


図 1 原遺跡の位置

## 2 原遺跡の調査状況

原遺跡は 2016 年より調査が行われ、2024 年 2 月現在第 8 次調査が進行中である。6 世紀前半から 9 世紀末葉頃までの遺構、遺物が確認されている。「原遺跡第 8 次調査の概要」（川又 2023）からまとめると、主な遺構は以下の通りである。

（～ 7 世紀前半）

竪穴建物

（7 世紀中頃～後半）

竪穴建物（猿投窯・湖西窯の製品を含む）



1 辺 10m 程度の大型竪穴建物  
約 40 度西に傾く主軸方位を有する大溝と並  
行する材木堀

(7 世紀末葉～8 世紀前半)

竪穴建物、掘立柱建物群

(8 世紀前半～後半)

遺跡南西部に真北方向を基軸とする区画溝  
区画溝の内側に大型の柱掘方を有する掘立柱  
建物群

区画溝の外側に真北方向を基軸とした桁行  
10 間、梁行 3 間の大型掘立柱建物とその建  
替えの痕跡

(8 世紀末葉～9 世紀前半)

区画溝の内側に真北方向を主軸とする竪穴建  
物

区画溝の外側の遺跡北東部に小規模な柱穴で  
構成される建物群

(9 世紀後半～)

掘立柱建物がほとんど、竪穴建物は少ない

注目すべきは、7 世紀中頃～後半の遺構と  
考えられる約 40 度西に傾く主軸方位を有す  
る大溝と、8 世紀前半～後半の遺構と考えら  
れる真北方向を基軸とする区画溝である。郡  
山遺跡における I 期官衙から II 期官衙への  
移行にあたり、軸方向が変化したこと(長島  
2009)との類似性が想起される。現在行わ  
れている原遺跡の第 8 次調査では後者の区  
画溝の辺の長さを確認することが目的の一つ  
となっている(川又 2023)。

出土遺物は在地系の土器が大勢を占めてい  
るものの、以下のような遠方産のものも見つ  
かっており、広範囲な交流があったことがう  
かがえる。

(7 世紀後半)

猿投産・湖西産のフラスコ形長頸瓶や甕など  
の須恵器

下野、北武蔵などの系譜に連なる関東系土師  
器

東北北部系の特徴を有する土器

(7 世紀末葉～8 世紀前半)

武蔵南部の系譜に連なる関東系土師器  
美濃須衛窯産須恵器と思われる円面硯

(9 世紀)

灰釉陶器、会津大戸窯製品、墨書土器

猿投・湖西といった東海産の須恵器は、岩  
沼市内に点在する横穴墓群(7 世紀末葉～8  
世紀前半)からも見つかり、これら横  
穴墓の被葬者たちの生活母体が原遺跡にあっ  
た可能性が高い(岩沼市教育委員会 2021)。

### 3 陸奥国府から見た原遺跡の役割について

#### 3-1 陸上交通の要衝

古代において原遺跡のある岩沼地域は、『倭  
名類聚抄』の記載にある陸奥国名取郡の中の  
玉前郷に含まれると考えられている。『延喜  
式』に記載されている東山道陸奥国に設置さ  
れた駅家である「玉前駅家」の所在地に比定  
されており、多賀城跡より出土した 9 世紀  
代と推定される木簡にみえる「玉前割」もこ  
の地域に比定されている。原遺跡はその有力  
な候補と考えられている(岩沼市史編纂委員  
会編 2018)。

多賀城跡で出土した木簡は、多賀城勤務の  
安積軍団職員が多賀城内の上司に提出するた  
めの下書きとみられ、安積軍団に所属する会  
津郡の兵士が「玉前割」を越えて本土に帰還  
することを申請する内容となっている。「玉  
前割」は 7 世紀頃に駅家が整備された「東  
山道」と、719 年から 811 年にかけて太平  
洋沿岸に駅家が整備された「東海道」が合流

する地点にあたり、この両道と多賀城を往来する人々の検閲を行っていたことがうかがえる(永田 2016)。

このように原遺跡のある岩沼は、多賀城国府にとって街道合流点として監視を要する陸上交通の要衝であったと思われる。

### 3-2 水上交通の要衝の可能性

原遺跡は阿武隈川に接した低地に位置することから水上交通の要衝になりうる。

第1に「東海道」の延長の終着の渡し場としての存在である。原遺跡に渡し場があった証拠は見つかっていないが、「東海道」が「東山道」と合流するこの地点の近くにあったと考えられている(岩沼市史編纂委員会編 2018)。また、ほぼ真向いの対岸に実務官衙と倉庫を有する陸奥国巨理郡衙である三十三間堂官衙遺跡があり(宮城県ホームページ)、両岸に陸奥国の行政施設が存在したことから、川を挟んでの情報・物資の往来もあったのではないかと考えられる。これらの理由から、原遺跡の近くに渡し場があった可能性が高いと考える。

第2に阿武隈川上流域との水運拠点としての存在である。原遺跡から約20km上流の、阿武隈川右岸に隣接した角田郡山遺跡(角田市)には7世紀後半までさかのぼれる倉庫群が検出されており、水運利用の基地と考えられている(永田 2015)。また、近世においても、上流域の福島地方や伊具地方から仙台地方への米等の陸揚げの河岸として機能していたため(岩沼市史編纂委員会編 2018)、古代でも何らかの水運機能があったと考えるのが自然と思われる。

第3に太平洋航路の拠点としての機能である。東海産の須恵器が出土していることは、この地に南方との交流があったことを示している。近江俊秀は、常陸国以北の太平洋沿岸の河口付近にある官衙施設が太平洋航路の中継寄港地として使われた可能性を指摘し、官

衙の例として根岸官衙遺跡(福島県いわき市)、泉官衙遺跡(福島県南相馬市)を挙げている(近江 2020)。

これらのことから、阿武隈川河口に近い原遺跡は、多賀城国府への水上交通による中継寄港地の有力候補となりうる。

### 3-3 郡山国府との情報・物資の移動

郡山遺跡に国府があった7世紀後半から8世紀初めにかけては、朝廷と蝦夷との関係は比較的安定していた。郡山国府との主な情報・物資の移動は、近江の研究(近江 2016)や『岩沼市史』(岩沼市史編纂委員会編 2018)を元に考えると、以下のとおりと想定され、都方向への「上り」の情報や物資の移動が多かったと思われる。

#### (1) 駅馬を乗り継いでの緊急情報伝達

郡山国府から都への上りおよび下り  
(近江 2016)

#### (2) 租の納税のための移動

玉前以南の陸奥から郡山国府への下り  
(岩沼市史編纂委員会編 2018)

#### (3) 庸調の納税のための移動

玉前以北の陸奥から都への上り  
(岩沼市史編纂委員会編 2018)

郡山国府は東山道の端にあたり、都の周辺の駅家に比べ情報・物資の移動量は多くなかったと想定される。海路は大幅な遠回りとなるため、寄港地としての必要性は低かったと思われる。

### 3-4 多賀城国府との情報・物資の移動

原遺跡と多賀城国府との情報・物資の移動に影響を与えたであろう出来事が、多賀城国府創建期に起こっている。

720年 陸奥国の蝦夷の反乱

721年 石城・石背国の陸奥国への再併合

722年 陸奥・出羽国の庸調停止と税布制施行

724年 陸奥海道(出羽)の蝦夷反乱、多賀城国府創

## 建、鎮守府設置、鎮兵制開始

その後新しい城柵や城が作られ（737年 多賀、牡鹿、新田、色麻、玉造柵、759年 桃生城、雄勝城、767年 伊治城）、蝦夷との緊張が増し、朝廷からは軍団の派遣が行われるようになっていく。

原遺跡と多賀城国府との主な情報・物資の移動は、近江の研究（近江 2016）や『岩沼市史』（岩沼市史編纂委員会編 2018）を元に考えると、以下と想定される。国府や北方への「下り」の交通量が増大したと思われる。

### (1) 馭馬を乗り継いでの頻繁な緊急情報伝達

多賀城国府から都への上りおよび下り（近江 2016）

### (2) 大量の納税のための移動

玉前以南の陸奥から多賀城国府への下り（岩沼市史編纂委員会編 2018）

### (3) 大量かつ迅速な軍団、馬、武具、兵糧の移動

全国から多賀城国府への下り（岩沼市史編纂委員会編 2018）

多賀城跡の発掘調査では、8世紀末頃に南面の砂押川が改修され、陸路の東西大路と並んで太平洋から多賀城国府に至る場合の動脈として水路が整備されたと考えられている（吉野 2015）。『続日本紀』には、781年相模以下坂東六国に対し「穀 10 万斛を陸奥軍所に漕送せしむ」とあり、海上交通を利用して多賀城へと輸送されたことがわかる（永田 2016）。

774年、陸奥海道の新田による桃生城焼き討ちにより三十八年戦争に突入した。780年に多賀城国府が炎上した。

この前後、蝦夷との争いの激化により、仙台湾北部から北上川にかけての航路の安全が保てない時期があった可能性があると思われる。その状況では、陸上交通の要衝であり、水上交通による中継寄港地ともなりうる原遺跡が軍事物資の集積場所とならざるを得ない

のではない。例えば、東山道からの馬、東海道からの兵員、鉄等の武具、太平洋航路からの兵糧等を組み合わせ、戦闘可能な状態で多賀城国府に送ることなどが想定される。前線に近い多賀城国府へ至る東山道は重要な補給路になるとともに、原遺跡は多賀城国府を支える重要な兵站基地となる。この時期の原遺跡の遺構として真北方向を基軸とする区画溝や建替えの痕跡のある大型掘立柱建物が見つかっており示唆的であるが、兵站基地であったことを証明できる遺物は見つかっていない。

その後、坂上田村麻呂らの活躍により前線は北上する。808年までには、鎮守府が多賀城から胆沢城に移されたことにより（奥州市埋蔵文化財センターホームページ）、多賀城は陸奥国府としての役割のみを残し、原遺跡の軍事的な重要性は薄れていったと思われる。

三十八年戦争終結以降は、東山道終端の北上により交通量は郡山国府時代より増大し、交通の要衝としての機能は継続したと考えられる。

## 4 原遺跡と陸奥国府を結ぶ東山道ルートについて

原遺跡と陸奥国府の間の東山道は、特に三十八年戦争時を中心に経済的にも軍事的にも重要なルートであり、多量かつ迅速な物資輸送が行われていたと思われる。東山道の整備は、国の威信の表明が大きな目的であったとされるが、この区間は輸送路としての実需が大きいのではないだろうか。

そのルートのうち、岩沼市と名取市の間については、多くの研究者が現在の県道 39 号線に沿ったルート（以降ルート 1 と称する）を想定してきた（永田 2015 ほか）。『岩沼市史』（岩沼市史編纂委員会編 2018）では、仙台平野の第一浜堤上を通るほぼ江戸時代の奥州街道沿いのルート（以降ルート 2 と称す

る)を主張している。岩沼市では2009年に市史編纂事業に伴う岩沼市域の東山道の現地調査を行ったが、どちらのルートにもその痕跡を発見することはできなかった(岩沼市史編纂委員会編2018)。

ルートの高低差に注目し、国土地理院の電子国土Webの地形断面図作成機能を利用して現在の地図を基に高低差グラフを作成し、ルートとしての合理性を評価しようと試みた。図2は断面図作成対象ルートを示す。青い点線がルート1、赤い実線がルート2である。図3はルート1の高低差グラフ、図4はルート2の高低差グラフである。

ルート1は、丘陵越えの高低差が大きい。部分的に迂回すれば直線性が損なわれるため、兵馬の大量移動には不向きであると考えられる。

沿道に縄文時代以来の遺跡が数多く存在し、藤原実方朝臣の墓や鎌倉時代の東街道跡もあり、断層面からの湧き水や日陰となる木立があり徒歩での移動がしやすいことから、古代から地域の経済活動に必要な街道として存在していたと思われる。

ルート2は、高低差が小さくほぼ平坦であり、直線部分が多い。兵馬の大量高速移動には圧倒的にこちらが有利であると感じる。雷神山古墳のある愛島丘陵の東端が、原遺跡からも名取川沿いからも良い目印となっており、地域住民以外でもわかりやすかったのではないだろうか。

沿道の遺跡はルート1に比べ数が少ない。869年の貞観地震により沿道住民が被害を受け道路維持が困難になったことも考えられる。

以上のように、高低差から考えると原遺跡と陸奥国府を結ぶ東山道ルートとしてはルート2がより合理的と考える。



図2 断面図作成対象ルート

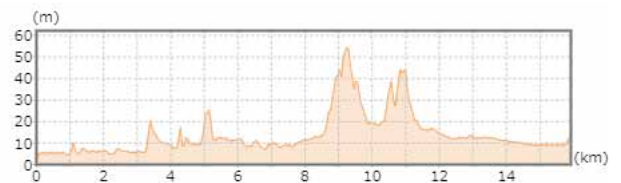


図3 ルート1の高低差グラフ

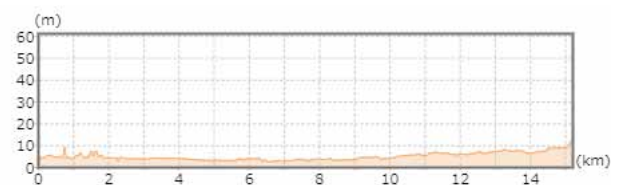


図4 ルート2の高低差グラフ

#### まとめ

原遺跡は、陸奥国府への交通の要衝、物資の集散基地として重要な拠点である。蝦夷との緊張関係が続いた三十八年戦争初期、軍用兵站基地としての機能も必要とされたのではないだろうか。

原遺跡と新旧の陸奥国府をつなぐ東山道は、多量かつ迅速な物資輸送が必要な時期があった。そのことを考慮すると、県道39号線に沿ったルート1ではなく、奥州街道に沿ったルート2と考えるのが合理的ではないだろうか。しかしながら、ルートを特定できる証拠は見つかっていない。



原遺跡では9世紀末葉以降の遺物がほとんど見つかっていないことから、三十八年戦争終了後、原遺跡の重要性が徐々に低下していったと思われる。

おわりに

本年、創建1300年を迎える多賀城国府が、大宰府にも匹敵する国の重要拠点であることを本レポートの作成を通じて知ることができた。岩沼市にある原遺跡が「玉前駅家」としてその機能を支える柱であったであろうことも見えてきて、岩沼市民として嬉しい限りである。

今回の調査で多賀城国府への物資運搬に海上交通を利用したと確認できた情報はごくわずかであった。私事で恐縮であるが、私の父は老後の趣味として、第二次大戦下における地元静岡市での戦時徴用船の調査を行っている。若いころ漁船員として、塩釜港や気仙沼港などの太平洋沿岸諸港に水揚げした経験があり、海に詳しい父であったが、近世での陸上の出来事に比べ海上の出来事は情報が少ない、特に戦時中の情報は得るのが難しいと言っていた。海の経験のない私が、千年以上前の情報を得るのが困難なのは当然だと納得した次第である。

今回の調査を通じ、現代と古代、宮城県と静岡県、時間や空間を越えたつながりを感じることができたことが、私にとって最大の成果かもしれない。今後も原遺跡の情報に注目するとともに、日本の古代史を中心に、歴史に興味をもって行きたい。

また、原遺跡の物的・人的インフラが、後の竹駒神社や馬市につながり、現在の岩沼の街の基礎となったといえるような、夢のある新発見が今後出てくることを期待しております。

謝辞

このレポートをまとめるにあたり、テーマ設定のきっかけと適切なアドバイスをくださった岩沼市教育委員会生涯学習課川又隆央主幹および市史資料室の方々に心から感謝申し上げます。

参考・引用文献およびWebサイト

岩沼市教育委員会(2021)『岩沼市文化財調査報告書第27集 原遺跡第5次調査概要報告書』岩沼市教育委員会

岩沼市史編纂委員会編(2018)『岩沼市史1・通史編I 原始・古代・中世』

近江俊秀(2016)『古代日本の情報戦略』朝日新聞出版

近江俊秀(2020)『海から読み解く日本近代史』朝日新聞出版

川又隆央(2023)「原遺跡第8次調査の概要」『令和5年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨』

長島榮一(2009)『郡山遺跡』同成社

永田英明(2015)「古代東北の内陸水運」『日本古代の運河と水上交通』八木書店

永田英明(2016)「古代東北の軍事と交通」『日本古代の交通・交流・情報1』吉川弘文館

吉野武(2015)「陸奥国の城柵と運河」『日本古代の運河と水上交通』吉川弘文館

吉野武(2015)「出土文字資料と多賀城碑」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館

奥州市埋蔵文化財調査センターホームページ  
鎮守府胆沢城 最終閲覧日2024年2月23日

<http://www.oshu-bunka.or.jp/maibun/publics/index/109/>

宮城県ホームページ 現地説明会資料 | 2003年亘理町三十三間堂官衙遺跡現地説明会資料 最終閲覧日2024年2月23日

<https://www.pref.miyagi.jp/site/>

maizou/33gendou.html

図版引用

図1～4 地理院地図（電子国土Web）に  
加筆 国土交通省国土地理院 [https://  
maps.gsi.go.jp/](https://maps.gsi.go.jp/) 地図データ取得： 2024  
年1月16日



# 後期旧石器時代仙台平野周辺の狩猟採集民の住居について

橋本 知之

## 1. はじめに

仙台市太白区長町南に富沢遺跡がある。小学校建設工事に先立つ調査の際に、約2万年前（C 14年代<sup>注1</sup>）の氷河期の針葉樹の森の跡に加え、石器製作跡や焚火の跡などの当時の人類の活動を示す貴重な遺構や遺物が発見されている。その発掘調査の成果については、発掘調査報告書（仙台市教育委員会 1992）や様々な出版物（斎野 2015、佐藤 2021 など）でも紹介されている。

筆者は令和5年度市民文化財研究員として、仙台平野を中心とした有史以前の人々の生活や活動について学ぶ機会をいただいた。特に旧石器時代についてはこれまで殆ど知識がなく、ゼロからの学びのスタートであった。そこで、1年の学びの成果をレポートとしてまとめるにあたって、ここ仙台平野周辺の後期旧石器時代の人々の活動、特に当時の狩猟採集民がどのような住居で暮らしていたのかについて、考えてみることにした。

## 2. 背景 — 当時の仙台平野周辺における旧石器時代の人々の活動について

後期旧石器時代の住居を考えるにあたっては、ここ仙台平野周辺部で活動していた旧石器時代の人々が、どのような材料を使って、どのような狩猟具を製作し、どのような戦略を立てどのように行動していたかを抜きに考えることはできない。そこでまず、人類の誕生から、日本列島の東北地方、特に仙台平野周辺での後期旧石器時代の活動の様子を、これまでに得られている考古学的資料から考察する。

最新の研究成果から、人類はおよそ700万年前にアフリカで類人猿から分かれ、直立

2足歩行を始めたとされている。現生人類であるホモ・サピエンスは、およそ40万年～25万年前にアフリカで誕生し、その後、出アフリカを経て一部の人々が東アジアに到達し、およそ38,000年前<sup>注2</sup>には日本列島に渡ってきたと考えられている（森先 2021 など）。後期旧石器時代の人類は狩猟採集生活を営んでいたため、狩りを行いながら移動生活をしてきた。定まった住居に住み続けることはなく、獲物を追って各所に移動しながら、日本列島に来るまでは主に洞窟や岩陰を利用して生活していたと思われる（石野 2006）。ただ、日本の場合、居住に適する洞窟が少なかったため、洞窟の代わりとして仮設のテントのような住居を作って生活していたと考えられている。



図1 環状のムラ復元図（工藤 2022 より引用）

後期旧石器時代前半にみられる環状ブロック群（環状のムラ<sup>注3</sup>）と呼ばれる遺跡の復元図には、毛皮で覆ったテント状の住居（図1）が描かれている（工藤 2022）。東北地方の環状のムラとしては、秋田市の地藏田遺跡が挙げられる。環状のムラの形成要因については、①大型獣狩猟説、②石材交換説、③保安説などが挙げられている（堤 2009）。



鹿又喜隆は、地蔵田遺跡の出土状況を総合的に検討したうえで地蔵田遺跡での環状ブロック群成立の目的について考察した結果、「ここでは大型獣狩猟説に従った」と述べている(鹿又 2011)。

富沢遺跡で活動痕跡が残されていた後期旧石器時代後半になると、河川に沿ってブロック群が残されるようになり、いわゆる“川辺のムラ”が作られ、ナイフ形石器が製作されるようになった。そして槍先形尖頭器が作られる頃には、田名向原遺跡(神奈川県相模原市)に代表される、柱穴を伴った準定住のイエもみられるようになる(安蒜 2007)。そしてその後、縄文時代に入ると竪穴住居が集まったムラが作られ、本格的な定住生活に移行する。

仙台平野のある東北地方、特に宮城県内の後期旧石器時代の遺跡の特徴をみると、日本海側で採集できる珪質頁岩への依存度が高い<sup>注4</sup>。このことから宮城県内の旧石器時代の人々は、“埋め込み戦略”などの生業戦略を立て、狩猟採集活動をしながらか石器の原材料を獲得していたと思われる(小野 2018、阿子島 2021 など)。葉菜山麓遺跡群(宮城県加美郡加美町)では後期旧石器時代を通して遺跡が残されていることから、旧石器時代の人々がある程度連続して生活を営んでいた可能性が考えられる。しかし、そのほかの地域、例えば仙台平野周辺では、富沢遺跡の他、野田山遺跡、上ノ原山遺跡、山田上ノ台遺跡など単発的に小規模の活動痕跡が発見されているに過ぎない(鹿又 2003、熊谷 2018、阿子島 2021 など)。熊谷亮介は、山形県の新庄盆地周辺の遺跡(乱馬堂遺跡、太郎水野2遺跡など)と仙台平野周辺の遺跡(上ノ原山遺跡および野田山遺跡)から出土したナイフ形石器の形態解析を通して、仙台平野周辺で新庄盆地と同様の生業活動を想定することは困難であるとし、それぞれの環境に合わせた生業活動を復元することの重要性を指摘して

いる(熊谷 2018)。残念ながら仙台平野周辺で回帰性のある活動を行った痕跡が残された遺跡が確認されていない現状<sup>注5</sup>では、小集団が単発的に仙台平野周辺部に訪れたものの、定着することなく立ち去った可能性は捨てきれない。稲田孝司は、著書の中で、富沢遺跡から狩りの獲物の骨が見つかっていないことから、動物の肉を常用できたことに疑問を呈しつつ、植物食の可能性について言及している(稲田 2001)。当時の仙台平野周辺部が旧石器時代の人々にとって暮らしやすい地であったかどうかを含めて、今後の研究の進展に期待したい。

### 3. 毛皮テントの利用についての検討

それでは、これまでに発見されている遺跡の痕跡が示すような、短期間の非回帰性の遊動活動を行う小集団は、どのような住居で生活していたのだろうか。移動する先々に好都合に洞窟があるとは限らず、通常は仮設住居を作り、使用していたと考えるのは自然である。ただ、その仮設住居が、果たして前述の環状ブロック群の復元図に描かれているような、柱を立て、動物の毛皮で覆った様なものであったであろうか。柱材や毛皮など移動生活の中での可搬性を中心に検討してみたい。

検討に入る前に、富沢遺跡が残された後期旧石器時代後半期の毛皮の利用状況について述べる。堤隆は、ナイフ形石器の定形化がみられる後期旧石器時代前半期には搔器の確立がみられると述べている。また、時代は富沢遺跡より新しくなるものの、後期旧石器時代末葉の細石刃石器群の搔器の出土状況を整理し、北海道、東北では遺跡の56%以上から搔器が検出されているのに対し、北陸や中部北では33%、関東では22%、中国・四国や九州では僅か4%と北へ行くほど搔器を伴う遺跡の割合が大きくなることを示した。また、搔器の使用痕分析から、搔器は皮の搔き取りに使用されていたと推定し、防寒衣等と

しての利用を通して寒冷地適用の一つであると推定している(堤 2003)。このことから、富沢遺跡の時代に毛皮が人工的に加工され、皮革として生活に利用されていた可能性は高いと考えてよいだろう(以下、毛をつけたままなめし加工を施したものを“毛皮”と称する)。

しかしその一方で、可搬式のテント類を使用していたと考える場合、活動している小集団は可搬式テントの部材を携帯して、キャンプ地を移動していたことになる<sup>注6</sup>。そこで、可搬式テントを立てるときにどのような材料がどの程度必要となるか、そしてその材料を可搬することは可能だったのか、以下で検討を試みた。

### 3.1 検討方法

仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)では、旧石器時代の人々の活動をイメージしてもらうために、「ミュージアム・シアター“狩人登場!!”」という、旧石器人に扮したアクターが館内外で活動するイベントを実施している。富沢遺跡の旧石器時代の人類の活動跡では住居状遺構は見つからないものの、イベント用として仮設テントを製作し、展示している(写真1)。仮設テントに使用している毛皮は、現在市販されているエゾシカの毛皮である。検討の対象としている仙台平野にある富沢遺跡では、人類の活動痕跡がみられた時期の近くの層から、シカとみられる動物の糞が多数発見されている。発掘調査報告書によれば、糞の形状や大きさから現存するニホンジカ程度の大きさであったであろうと推定されている(仙台市教育委員会 1992)。ほぼ同時期の山形盆地の埋没林から発見されたシカと推定されている糞(山野井 2023)も同様な形状、大きさであることから、当時の東北地方中南部地域にはこの程度の大きさのシカが生存していたと考えてよいであろう。



写真1 富沢遺跡保存館の展示用仮設テント

富沢遺跡保存館で仮設テントに使用されているエゾシカは分類上ニホンジカに含まれており、その中でも大型の部類に属する。後期旧石器時代は大型獣が減少、絶滅し、小中型獣中心へと変化した時代であると考えられている。また当時は最終氷期最寒冷期(LGM)にあっており、現在より年間平均気温が7~8℃程度低かったと考えられている。ベルクマンの法則によると恒温動物は寒冷化すると大型化する傾向があるとされている。このことから、当時寒冷な環境下に分布していたシカを、現代では大型に分類されているエゾシカで置き換えて考察することは大きく的外れではないと思われる。

富沢遺跡保存館では、展示用仮設テントに用いられている毛皮を含め10枚のエゾシカの毛皮を所有している。まずはこれらの毛皮の形状や大きさ、重さについて計測し、住居に用いた場合の毛皮の平均的な形状や重量について議論する。そののちに狩猟採集民の平均的な小集団と考えられる(安蒜 2007)7名から15名程度が、可搬式テントで生活していると想定し、住居製作に必要な毛皮や木材の量を推定したうえで、一人当たりの運搬量を算出し、その実現性について検討した。

### 3.2 仮設テント材の計測結果及び考察 まず、富沢遺跡保存館で保有している仮設

テントの展示品を含め、保有するすべての毛皮について形状や大きさ、重さについて計測を行った。結果を表1に示す。縦、横の寸法は最大値を採用している。表面積については、写真2と表2の例に示すように、20cm毎の方眼紙状の台紙を作成し、その上に測定する毛皮を乗せ、各区間内で毛皮の占める割合を10%単位で目視にて推定し、それを累計することによって全体のおおよその表面積を推定した。

毛皮番号	縦 (cm)	横 (cm)	重さ (g)	表面積 (cm <sup>2</sup> )	種別	重さ/表面積 (g/cm <sup>2</sup> )
1	146	125	980	12320	夏毛	0.0795
2	145	118	975	10840	♀	0.0899
3	131	114	800	10040	♀	0.0797
4	140	111	1010	10560	♀	0.0956
5	133	109	850	9880	♀	0.0860
6	126	124	825	9680	♀	0.0852
7	140	123	1520	10760	冬毛	0.1413
8	144	144	2300	12320	♀	0.1867
9	147	133	1415	11680	♀	0.1211
10	125	92	785	7840	♀	0.1001

表1 毛皮計測結果



写真2 毛皮番号1の記録写真

		0	0.9	0.6		
	0.1	0.5	1	0.9	0.4	0.1
	0.8	1	1	1	1	0.5
	0.7	1	1	1	1	0.4
	0.8	1	1	1	1	0.1
0	0.6	1	1	1	1	0.2
0	0.8	1	1	1	1	0.9
0	0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1

表2 毛皮番号1の表面積計測

毛皮の大きさは縦（体長方向）に125cm～147cm（平均136cm）、横（胴回り方向）に92cmから144cm（平均118cm）と平均に対し±10%から20%程度とばらつきは小さい。同様に表面積のばらつきを比較してみると、7,840cm<sup>2</sup>～12,320cm<sup>2</sup>という結果であった。毛皮の大きさについては想像していたよりも大きさのばらつきは小さいものとなったが、サンプル数が少ないため、議論の対象とはしない。もし、獲物の大小によるばらつきがもっと大きかったと仮定した場合、得られた毛皮は大きさによって衣類など多用途に活用したのであろう。

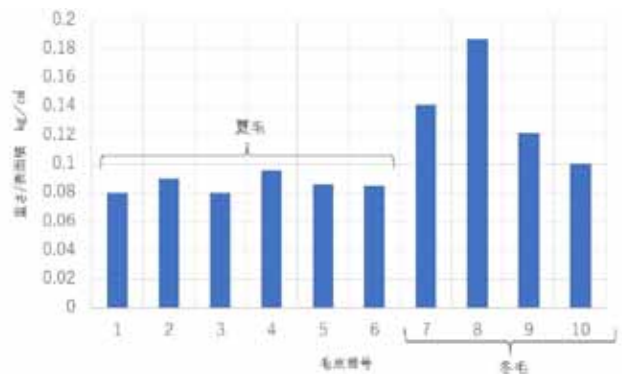


図2 毛皮の表面積当たりの重さの比較

大きさのばらつきが小さかったにもかかわらず、重さについては785g～2,300gと個体差は大きかった。表1や図2に示すように、単位面積当たりの重さで比較すると、夏毛では0.080g/cm<sup>2</sup>付近で軽く、ほぼ均一であるのに対し、冬毛は単位面積当たりの重さにばらつきはあるものの、相対的に夏毛に比べ重くなっていることがわかる。実物を確認してみると毛皮の厚さは夏毛に比べ冬毛の方が厚くなっており、重量の増加の原因は冬季であることによる皮内部への脂肪のため込みと、冬毛の増加によるものであると考えられる。興味深い点として、毛皮番号10に注目してほしい。この資料は冬毛ではあるものの、縄文の森広場と地底の森ミュージアムのボランティアでなめし作業を行った資料であるとのことであった。実際に手で持って確認すると、

他の冬毛に比べ毛皮の厚さが薄く処理されており、柔らかさも夏毛製品の感触に近い。このことから、冬毛素材であっても処理によっては夏毛に近い柔軟性や重量に仕上げることが示されているのではないだろうか。

前述の様に、検討対象としている富沢遺跡の時代は、現在の気候に比べ冷涼な環境にあったと考えられており、“住居”としての機能には防風や防雨雪などの防寒性や、保温性が要求されたであろうことは容易に察しがつく。検討例として挙げている富沢遺跡の仮設テントの場合、テントを組み立てているスタッフの注意点として、「隙間をあけないように注意している」との話もあった。そうしたした場合、写真2に示すような不規則な形状の毛皮の場合、隙間なく貼りつめる際には「頭部や四肢の付け根部に生じている”切れ目”の処理に手間がかかることに気づくであろう。効率よく隙間なく貼り合わせるためには、ある程度定型的なシンプルな形である方が都合が良い。そこで、毛皮をできるだけ広い台形で代表させることで、個々の毛皮の有効寸法を定義した。写真2で示した毛皮番号1の代表寸法を計測した例を図3に、その他の毛皮についても整理してまとめた結果を表3に示す。10枚の毛皮の平均値として、台形の上底と下底の平均が91.9cm、縦方向長さの平均が92.2cm、平均有効表面積は8,473cm<sup>2</sup>となり、全体の表面積に対する有効表面積の割合の平均は0.80となった。

写真1に示す展示用仮設テントは、居住部の高さ170cmで底面は140cm程度の三角錐状の形状である。通常は、夏毛6枚で3つの内の2つの側面を覆っており、毛皮番号7で床部分を覆うようにして展示されている。実際に仮設テントとして使用する場合、当然もう一つの側面も覆う必要があるため、側面用の毛皮としては計9枚が必要となる。夏毛素材（毛皮番号1～6）の平均重

量は907gであるため、9枚分8,163gと床面用の1,520gを加えて毛皮重量のみでおおよそ10kgとなる。重さもさることながら、毛皮の総体積は嵩張るため、キャンプ地の移動の度にこの量の毛皮を運搬していたと考えるのは現実的ではないのではないだろうか。



図3 毛皮番号1の代表寸法計測例

毛皮番号	素材表面積 (cm <sup>2</sup> )	縦 (cm)	上横 (cm)	下横 (cm)	平均横 (cm)	有効表面積 (cm <sup>2</sup> )	有効面積割合
1	12320	100	96	90	93	9300	0.755
2	10840	90	108	100	104	9360	0.863
3	10040	88	84	104	94	8272	0.824
4	10560	102	84	92	88	8976	0.850
5	9880	86	82	104	93	7998	0.810
6	9680	84	84	86	85	7140	0.738
7	10780	80	80	120	100	8000	0.743
8	12320	110	78	116	97	10670	0.866
9	11680	90	90	100	95	8550	0.732
10	7840	92	60	80	70	6440	0.821

表3 有効寸法測定結果

### 3.3 グループ用共同仮設テントとしての可搬性の検討

2章でも述べたように、狩猟採集民は、2～3家族程度で構成される7名から15名程度の小集団を形成し、活動していたと考えられている（安蒜 2007）。一般的に構造物は、小さなユニット単位で複数個製作するよりも、大きなものを一つ作って多人数で使用する方が効率が良い。多人数で使用する場合には側面の覆いを共有することができるため、



一人当たりの覆いの量を削減することが可能  
 なはずである。この効果を見積もるため、7  
 人共用の場合と 15 人共用の場合について  
 テントの大きさを推定したうえで、覆いに必  
 要な毛皮の量を計算した。テントの形状につ  
 いては、田名向原遺跡にある住宅状遺構の復  
 元図（図 4）を参考にして以下のような概略  
 形状とした。外観はドーム状として、高さは  
 当時の人が手を伸ばして作業できる限界値と  
 して、中心部で 170cm と定めた。床面積に  
 ついては、一人当たりの占有床面積は最低限  
 畳 1 畳分が必要だったのではないかと想定  
 して 1.62㎡ / 人とし、入口部などの共用  
 スペースを一人分として算入した。この計算  
 式に従えば、7 人用テントは半径 2.0m、15  
 人用テントは半径 2.9m となる。算出した床  
 面積となる半径の外周から垂直に高さ 80cm  
 の壁を設けた。そして天井部は壁の上部から  
 高さ 170cm の中心部天井へ向けて円錐状に  
 定めた。

この形状を基に、前節で見積もった毛皮一  
 枚当たりの平均有効面積 8,473cm<sup>2</sup>、夏毛 1 枚



図 4 田名向原遺跡の住居状遺構の復元モデル  
 （相模原市教育委員会 2017 より引用）

あたりの平均重量 907g から毛皮の総量と、  
 小集団構成員一人当たりで運ばなければなら  
 ない毛皮の量を計算した。尚、床部分につ  
 いては全体を隙間なく覆う必要性はないと考  
 え、一人ずつ自分の居場所に毛皮を 1 枚敷  
 くとして仮定した。テントを立てるために必要  
 な毛皮の量は、7 人用の場合で 36 枚、15 人  
 用の場合で 65 枚と見積もられる。実際に貼  
 ってゆく際には、貼る場所の形状と毛皮の形  
 状に差異が生じ、また上部になるほど幅が狭  
 くなるため、毛皮のつなぎ目には重なり部が  
 増えてしまうのは避けられない。その部分を  
 考慮して必要な毛皮の量を 1.3 倍とした場  
 合、7 人用テントでは 44 枚、15 人用テ  
 ントでは 80 枚の毛皮が必要となると推察さ  
 れる（表 4）。一人当たり換算すると、7 人用  
 テントの場合ではおよそ 6.3 枚、5.7kg、15  
 人用テントの場合ではおよそ 5.3 枚、4.8kg  
 と考えられる。

### 3.4 考察

実際にテントを立てる場合、毛皮の他に長  
 い柱材や短めの棒材を格子状に組み、毛皮を  
 貼り付ける作業になる。富沢遺跡保存館の展  
 示用のテントの場合、長さがおおよそ 250cm、  
 太さが平均で直径 4.4cm の柱材を 3 本使用し  
 ている。重さは平均で 2.2kg 程度であった。  
 多人数用テントを立てて毛皮を貼り付けてゆ  
 く場合、毛皮の大きさより小さめの枠で区切  
 る必要がある。3.2 項で述べたように、毛皮  
 の有効部分はおおよそ 90cm 四方程度の大き  
 さと推定されている。これを貼り付けるため  
 に、これより少し小さめの、例えば 80cm 幅

人数	必要面積 (cm <sup>2</sup> )	大きさ (cm) (半径または 1 辺)	床面積 (cm <sup>2</sup> )	天井 (cm <sup>2</sup> )	側面 (cm <sup>2</sup> )	床枚数	天井枚数	側面枚数	計	一人当たり枚 数	一人当たり重量 (g)
1		140.0	16974	51110	0	1	7.8	0.0	8.8	8.8	
7	129600	203.1	129600	137801	102093	7	21.1	15.7	43.8	6.3	5677.2
15	259200	287.2	259200	276640	144382	15	42.5	22.2	79.6	5.3	4813.9

表 4 毛皮必要量見積もり推定結果

程度で天井や壁の構造を組んでいくことを考える。

床部外周から求めると、テントの経線に対する棒材は、7人用テントの場合、外周1,260cmであることから16本程度、15人用テントでは外周1,820cmから23本程度必要であると見積もられる。必要な長さは、先に形状を仮定した周部から中央へと結んだ天井部の円錐の長さで考えれば、7人用テントでおよそ220cm、15人用テントでは300cm強となる。この全てに展示用テントの例で用いている太さの棒が必要だとは言えないが、貼り付ける毛皮の総重量が、7人用テントで約40kg、15人用テントで約72kgにも達することを考えれば、それなりに頑丈な棒を用意する必要がある。

棒材について持ち運びを考える場合、棒材の長さを減らす代わりに本数を増やすことも可能である。但しその場合、テントを立てる際の棒の接合部の処理が問題となる。強度を保ったまま組み立てることに対する難易度は、接合部が増えるほど飛躍的に高まることは想像に難くない。

棒材について、運搬の負担を減らすためには、可搬式ではなく、現地調達を行うという選択肢はある。ただ、手頃な真っ直ぐな棒材が都合よく入手できるとは考えにくい。また、使えそうな棒材を集め、余分な枝を切り離すなどの加工作業が必要となってしまうなど、組み立ての際の作業量は増大する。また、棒材が曲がっていたりゆがんでいたりすることにより、毛皮を貼り付ける表面積が増大したり、重なり部が増えることによって、必要な毛皮の量も増えてしまうことも考えられる。これらの理由から、有効な方法であるか考えたとき、仮設テントの利用については疑問が生じてしまう。

現代にわずかに残った移動採集民族の例では、本稿で想定した仮設テントを住居とする例は多くみられる（今村2019）。しかし、

その例の多くは家畜を飼うなど、重量物の運搬手段を確保できる場合にみられている。日本では家畜を飼うようになったのは、定住化が進んだ縄文時代以降であると考えられており、人力のみで活動している旧石器時代においては、余程長期の滞在を想定しないとこの様な仮設テントの利用は選択しづらい様に思われる。

#### 4. まとめ

文化財研究員として活動する機会をいただき、仙台平野周辺の最終氷期最寒冷期における後期旧石器時代の人々が、何を目的に、どのような活動をしていたか、について学ぶことができ、その学びを通して常に疑問であった、「当時の住居はどのようなものであったか？」を考えてみた。その結果を明確に示すことはできなかったものの、毛皮を貼り付けた仮設テントの活用は、重い資材を持ち運び、その設置に対し過大な作業が必要となるであろうことから、かなり長期の滞在や複数回の繰り返し使用を想定しない限り、難しいのではないかと、という感触を示すことはできたと思う。

この地で仮設テントを使用するような滞りが行われていたのだとすれば、長期滞在を可能とする生業や、食物資源をもとにした生存戦略があったはずである。ここ仙台平野周辺で最も活用しうる資源といえば、水産資源が挙げられるであろう。その意味で今後、新たな旧石器時代遺跡が、水産資源を活用しやすい川辺に近い小高い丘の上などに発見され、そこに繰り返し居住した形跡を残す活動跡がみつかることをひそかに期待している。

文化財研究員として、1年間の間、学びの機会をいただき、隔週の講義、館外活動や学芸室での考古学雑誌や書籍の閲覧など楽しい時間を過ごさせていただいた。改めて、学芸室の皆様には厚く御礼を申し上げます。特に文化財研究員に対するお世話をご担当いただいた

鈴木さんには、毎回の講義の準備や、館外活動の計画調整準備、そして指定日以外の訪問に対するご対応など、お忙しいお仕事の中で様々なご支援、ご教示をいただいた。心より感謝の意を表す。

#### 脚注

註1：放射性炭素であるC14の存在割合から算出された遺物の年代推定値。1950年を基準として何年前の遺物であるかを数値で表す。単位はBP (before presentの略)。但し資料が生育していた当時のC14の大気中の存在割合が常に一定であることなどを前提としているため、正確な年代推定のためには各種の較正を行う必要がある。また、年代値算出の基礎となるC14の半減期も技術の発展に伴って変化してしまっただけでなく、長く使用されていた5568年とするように定められている（現在の最新研究値はおよそ5730年）。そのため、この放射性炭素年代という数値は、年代値を表しているのではなく、遺物内の放射性炭素の残存割合に基づく値を示しているに過ぎないことに注意が必要。ちなみに富沢遺跡の年代20,000BPでは、暦年代（または較正年代）の方がおよそ4,000年程度古い（出穂2022）。

註2：ホモ・サピエンスが日本列島に到達した時期については、旧石器時代の遺跡が日本各所に出現していることから、およそ38,000年前頃であろうことが現在の考古学では定説となりつつある。その一方で、人類の列島での活動の始まりについては、岩手金取遺跡や大分早水台遺跡など、数万年から十数万年前に遡ると主張する説もある（佐藤2017）。これら38,000年前を遡る遺跡は、確かなものであれば旧人などに分類される人類であると考えられ、中期もしくは前期旧石器時代に相当することになる。

註3：安蒜政雄は自身の発表論文の中で、

後期旧石器時代前半初頭にみられる環状ブロック群を“環状のムラ”、後期旧石器時代後半にみられる河川に沿ったブロック群を“川辺のムラ”と称して区別した。

註4：大場正善によれば、例外的に村田町近辺の駕籠沢遺跡近辺では、地場で採集できる玉髓をもちいた石刃の製作、配布場となっていたと思われるが、極短期間の活動であったと推定している（大場2018）。

註5：但し熊谷は野田山遺跡でナイフ形石器の使用痕分析を行い、使用頻度が多くない状況で残されていた状況から、回帰を予定したうえで立ち去った可能性について言及している（熊谷2018）。また、佐藤は青葉山E遺跡の陥し穴状遺構を取り上げて、列島最北の旧石器時代の陥し穴跡の検出例としている（佐藤2002）。それが正しいければ、陥し穴猟が成立する程度の長期、もしくは複数回にわたる繰り返し活動が行われていた可能性が考えられる。

註6：熊谷によれば、狩猟採集民の居住システムを考察する際用いられる民族考古学による理論モデルとして、狩猟採集民のロジスティカルな資源収集と居住移動の様式に着目したフォレジャー・コレクターモデルが有名で、環境の諸要因との相関が認められるとされる（熊谷2018）。一般的にベースキャンプ毎に移動を行うフォレジャー型は食料資源の豊富な熱帯地域に多く、拠点となるベースキャンプを置き、回遊活動を行うコレクター型は寒冷地に多いとされている。当時の仙台平野周辺の環境は現在よりも寒冷であったと想定されているため、コレクターモデルに近いタイプを選択していた可能性は高いと推定できるものの、その小集団の活動の目的によっても異なると思われるため、本稿では議論しない。ただ、食料や石材などの新しい資源を探索しているのであれば、フォレジャー型に近い形態をとった可能性は残るであろうことを指摘しておく。

参考・引用文献

阿子島香 (2021) 『氷河時代のハンターたち』  
東北歴史博物館 2021 年度館長講座④概要  
安蒜政雄 (2007) 『住まいの考古学 1 旧石器時代の住まい』 学生社  
石野博信 (2006) 『古代住居のはなし、歴史文化セレクション』 吉川弘文館  
出穂雅実他 (2022) 「仙台市富沢遺跡 27 層コンポーネントの年代決定：古本州島北部における最終氷期最盛期の石器群の年代と古サハリンー北海道ー千島半島との関連」 『旧石器研究第 18 号』 日本旧石器学会  
稲田孝司 (2001) 『遊動する旧石器人』 岩波書店  
今村薫 (2019) 「カザフ人の移住に伴う伝統技術：ラクダによる運搬と移動式住居の組み立て方」 『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇第 55 巻第 2 号』 名古屋学院大学  
大場正善 (2018) 『駕籠沢遺跡での石器づくりー玉髓原産地遺跡における石器製作に対する石器技術学分析ー』 宮城県考古学会編 宮城の旧石器時代遺跡  
小野章太郎 (2018) 「宮城県域の旧石器時代石器群の編年と石材利用」 『宮城の旧石器時代遺跡』 宮城県考古学会  
鹿又喜隆 (2003) 「野田山遺跡出土石刃石器群の研究」 『宮城考古学第 5 号』 宮城県考古学会  
鹿又喜隆 (2011) 「地蔵田遺跡出土石器の機能研究と環状ブロック群形成の解釈」 『秋田市地蔵田遺跡ー旧石器時代編ー 付編 3』 秋田市教育委員会  
工藤雄一郎編 (2022) 『復元イラストでみる！ 人類の進化と旧石器・縄文人の暮らし』 雄山閣  
熊谷亮介 (2018) 「宮城・山形県域の後期旧石器時代後半期における移動と居住一定量解析による石器研究の展望ー」 『宮城野旧石器時代遺跡』 宮城県考古学会  
斎野裕彦 (2015) 『日本の遺跡 50 富沢遺

跡 東北の旧石器野営跡と湿地林環境』 同成社

相模原市教育委員会 (2017) 『旧石器ハテナ館パンフレット』

佐藤宏之 (2002) 「日本列島旧石器時代の陥し穴猟」 『国立民族学博物館調査報告第 33 巻』 国立民族学博物館

佐藤宏之 (2017) 「日本列島の中期 / 後期旧石器時代移行期に関する再検討」 『ラーフィダーン第 XXXVIII 巻』 国土館大学イラク古代文化研究所

佐藤祐輔 (2021) 『シリーズ「遺跡を学ぶ」地底の森の旧石器人 富沢遺跡』 新泉社

仙台市教育委員会 (1992) 『仙台市文化財調査報告書 160 富沢遺跡第 30 次調査報告書 旧石器時代編』 仙台市教育委員会

堤隆 (2003) 「後期旧石器時代の石器群と寒冷地環境への適用戦略」 『第四紀研究 42 (3)』 日本第四紀学会

堤隆 (2009) 『旧石器ガイドブック シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊 02』 新泉社

森先一貴 (2021) 『日本列島四万年のディープヒストリーー先史考古学から見た現代ー』 朝日新聞出版

山野井徹 (2023) 「氷河期を語る埋没林 隣県の山形盆地を例に」 『富沢遺跡保存研究会 埋没林と野外展示「氷河期の森」その価値と魅力』 配布資料

図版引用

図 1 工藤雄一郎編 (2022) 『復元イラストでみる！ 人類の進化と旧石器・縄文人の暮らし』 雄山閣

図 4 相模原市教育委員会 (2017) 『旧石器ハテナ館パンフレット』

写真 1・2、図 2・3、表 1～表 4 筆者撮影および作成





## 市民文化財研究員活動報告書 28

発行日 令和6年(2024)年3月31日

編集・発行 公益財団法人 仙台市市民文化事業団  
仙台市富沢遺跡保存館(地底の森ミュージアム)  
〒982-0012 仙台市太白区長町南 4-3-1  
TEL 022-246-9153